

まごころだより

2019.4月号



3月17日、まごころが所属する富山ケアネットワーク主催で「トリプル祝賀会」が行われました。「トリプル」つまり3つのめでたいことの合同祝賀会です。

その3つとは

一つ目は「富山ケアネットワーク」が共生を理念とした富山型デイサービスの普及を図り地域福祉に貢献したということで『富山県功労賞』を受賞したこと。

二つ目はそのケアネットワークの代表である惣万佳代子さんが社会福祉に功績のあった人に贈られる『藍綬褒章』を受賞されたこと。

三つ目は惣万さんの片腕として行動を共にしてきた西村和美さんが他の模範となるような業績を有する者に授与される『黄綬褒章』を受賞されたこと。

この3つのおめでたいことを合わせての祝賀会でした。



惣万さんや西村さんの受賞は勿論嬉しいことでしたが、私にとっての一番の喜びは、自分たちがやっている富山型・共生の理念が地域福祉に貢献していると認められたことでした。

富山型と言われる介護施設は、年齢や障害の有無に関わらず誰でも受け入れるというのが目に見える、形の上

での特徴です。ですから介護認定を受けた母親と障がいのある子供と一緒に利用できますし、赤ちゃんも利用できます。しかし高齢者も赤ちゃんも、障がい者も健常者も一緒にいればそれで「富山型」とかという、決してそうではありません。富山型が理念とする「共生」とは、単に形の上でいろんな人が一緒にいる(共に生きる)というのではなく、『共に助け合って生きる』という精神を持った「共生」なのです。『助け合って』ということですから、支援する者・支援される者という区別はないのです。一人ひとりが何らかの役割を持ち、お互いに助け合って生きるということです。富山型であるデイサービスまごころは、そういう理念を持った施設です。

まごころでは、多くの利用者に家事を手伝ってもらっています。最近は大工仕事の出来る男性利用者の方がいて、ちょっとした大工仕事をやってくれます。筆で字を書くのが得意で、お願いすると封筒の宛名書きをしてくれる人がいます。絵を描くのが上手で、頼まれるとあつという間に絵を描いてプレゼントしてくれる人もいます。障がいのある子供が困っていると職員に知らせてくれる利用者の方もいます。隣に座っている人にお茶を入れる人もいます。ただ私たちに食事や入浴の世話をされるだけではないのです。

私達は利用者一人ひとりが無理のない範囲で誰かのために役に立つことをしてもらいたいと思っています。利用者が介助を受けて「ありがとう」というだけでなく、「ありがとう」と言ってもらえる、そんな場所であってほしいと思っています。そう言うと、赤ん坊や幼児は世話を受けるだけだと思われるかもしれませんが、決してそうではありません。まごころを開所した当時は、幼児の行動によって高齢者が怪我をするのではないかと心配の声もありました。しかし、実際子供が来てみると、子供の存在は高齢者を元気にし、子供が好きだからという理由でまごころを選び、子供を膝に抱きかかえる方もいました。子供がいるだけで、その場は和やかになり、どんな優秀なヘルパーよりも利用者を元気にしてくれました。



入浴や食事・排泄などの介助や、楽しい時間を過ごしてもらうのは介護施設としての必須条件です。しかし富山型の理念である「共生」の目指すところは、そこに留まるものではなく、「自分もまだまだ捨てたものではな

いぞ」と思えるような「役割」「生きがい」を持ってもらうことです。誰かの役にたつ、自分には役割がある、自分と会うのを楽しみにしている人がいる、そういう生きがいを感じてもらい、それがまごころの目指すところ。それが『互いに助け合って生きる』『お互い様』ということです。

そして『お互い様』の精神は施設の中だけでなく、地域にも広がって欲しいと思っています。今、まごころは地域に開かれた介護施設として分家を中心に、地域の方が参加し、利用者と一緒に活動する行事を数多く展開しています。それによって、利用者と地域の方との交流と共に、地域の方同士の交流も進んでいます。何かあったら、お互いに助け合えるような顔の見える地域を作り上げていかなければ、住み慣れた地域・自宅で最期まで住み続けることはできません。一人ひとりが自分に合った役割を持ち、住み慣れた自宅で最期まで過ごせる社会づくりを模索し、試行錯誤しているのが今の、そしてこれからの、まごころです。

1993年、日赤の看護師だった惣万さん西村さんが「このゆびと一まれ」を開所。

それから5年後、4つの事業所が集まり、富山県功労賞を受賞した「富山ケアネットワーク」が発足。志を同じくする仲間の集まりが出来ました。

それから更に6年後の2004年、私たちは惣万さんの理念に強く共感しデイサービスまごころを開設、「富山ケアネットワーク」に仲間入りしました。

共生の理念に基づいた介護は「富山型」として次第に認知されるようになり、4つの事業所から始まった富山ケアネットワークの仲間は、県内125か所、全国2000か所にも広がっています。その広がり介護理念が評価され、

去年、厚労省は「共生型デイサービス」という形を制度として認めるまでになりました。

今、「共生」の背中を押す風が吹いています。

まごころは「富山型」という原点を忘れず共生社会を目指し、これからも進化していこうと思っています。

最後に富山ケアネットワーク20周年記念写真集に掲載された惣万さんの言葉を紹介します。

♡♡♡♡♡♡♡♡

平成10年10月富山ケアネットワークが発足しました。4事業所からのスタートでした。集まって会合する場所もなく、ファミリーレストラン等で話し合ってきました。あのころは、利用料は実費をいただいていたので、経営は厳しく、倒産の危機が常につきまとっていました。それなのに、ケアネットの面白くて元気な仲間たちは「小さいことはいいことだ」「赤ちゃんからお年よりまで、一つ屋根の下で暮らすことはいいことだ」を合言葉に活動をしてきました。まとまっているようで、実はみんなバラバラの個性の集まりです。それが良かったのだと思います。

あれから20年が経ちました。平成30年度に「共生型デ

イサービス」が新設され、本格的に制度化されました。私たちが活動を続けてきたことが、国の制度に風穴を開けたのです。長い、長い20年でした。踏ん張り続けることができたのは、富山ケアネットワークを支えて下さっている、多くの皆さまのおかげだと感謝しています。

今回、富山ケアネットワークが富山県功労表彰をいただきました。それを機に20周年の証としての記念写真集「二十歳の喜び」を作ることになりました。原点から飛躍へ、そして繋ぐことをテーマに作成しました。一枚一枚の写真が、20周年の活動を物語っています。

これから、富山ケアネットワークはどこに進むのか、20年前の原点を忘れず、ブレないで力強く30周年に向かい、大好きな仲間たちと一緒に歩いていきたいと思ひます。

富山ケアネットワーク 会長 惣万佳代子

春よ来い

待ち遠しかった春が花をチラホラ見掛けられる様になると、冬の憂鬱な気持ちから少し開放されたように感じたりする。利用者との会話にも花見の話題を取り上げて盛り上げようとする。ですが中々興味を示して貰えないんです。

ある日職員が自宅の庭先に芽生えた彼岸桜を持参してくれたところ、とても喜んでくれました。そのタイミングで花見の話をする、光景が浮かんだのか早く観に行きたいとか昔どこかの桜を見たとか思い出されて話が広がっていったのです。写真とか実物を目にする、昔が思いだされるのでしょうか表情も明るくなります。暖くなれば出かける機会が増えます、できることなら思い出に残るようなお出かけになったら景色の良い所を探しているこの頃です。



一足早く満開



4月行事の予定

- | | |
|--------|-------------|
| 4日(木) | ハーモニカ演奏 |
| 8日(月) | 林夫妻の歌謡ショー |
| 11日(木) | 小物づくり |
| 17日(水) | ピアノ演奏 |
| 20日(土) | 惣菜またはお菓子づくり |
| 25日(木) | 食事会 |